口頭発表Ｂ③

社会人と学生がつくる自主講座『実用健康学～手当てとそのこころ～』を実施して

光永雅子[1)]、宮田健[2)]、庄司久子[2)]
１）徳島大学全学共通教育センター、２）徳島大学公開授業受講生

１．はじめに

平成 20 年度質の高い大学教育推進プログラム『地域社会人ボランティアを活用した教養教育～地域に広がる知の循環型社会の構築を目指して～』では、共創型学習科目をはじめとして、授業の中で、学生、社会人、教員、三者の学び合いを目指して様々な取組が実施された。年齢も、経験も大きく違うこの三者が同じテーブルにつき、互いの意見を交わし合う試みは、時に壁にあたり、時に大きく開け、まさに生きた取組となった。それは大学と地域との出会いであり、教養教育とは何か、「知」とは何かを問う試みであった。

2 年目になる今年度は、さらに学び合いを発展させる場として、授業の枠を越えた【学びのコミュニティー】が創出された。ここでの活動は全てが課外活動であり、学生や社会人が中心となって作り上げる自主的で創造的な取組である。そこに集う個性のように様々な課外活動が実施された。その中の一つ、『実用健康学～手当てとそのこころ～』では、これまでの社会人参画の授業での経験を生かして、学生と共に自らの手で学ぶ場を設置する自主講座の形で開講した。ここでは、この講座を通じて得た学びついて紹介する。

２．取組内容

『実用健康学～手当てとそのこころ～』は、東洋医学の視点をもとにしつつ、洋の東西を問わず人類が求め続けてきた「健康」と、私たちのごく身近にありながら、忘れてしまいがちな「手当てのこころ」をもう一度見直してみたいというコンセプトから始まった。健康や命に関しての理論と実践を踏まえて、「本当の健康とは」、そして、「現代において求められる健康とは」、について世代を越えて議論をおこなった（写真１）。意見交換や体験学習（写真２，３）の過程を通じて、健康に関する考え方や世代を超えて学び合うことの意味を、学生自身に掴んでもらいたいとの取組者の想いがあった。

『実用健康学～手当てとそのこころ～』
日時：隔週火曜日 9:00~10:10
　　隔週木曜日 14:20~15:30
　　（両日同内容で実施）
場所：学生支援室
＜各回のテーマ＞
10/6.8　生命を考える【陰陽五行説】
10/20.22　健康って？【素問・養生訓より】
11/30.12/3 徳島大学薬学部薬草園見学
12/8.10　薬と健康【西洋薬と漢方薬】
12/16　薬食の伝統【身近な薬食から】
1/19.21　食と健康【食材と食事環境】
1/26.28　身体と心の手当て
2/9　健康リスクを知る
2/16.18　まとめ

＜アンケート・自由記述より＞
（学生）
・好奇心が刺激された。
・視野が広がった。
・東洋思想の考え方が印象深く、新しい視点を持てた。
・毎回参加者と意見交換ができて良かった。
・自然と私たちの健康とのあり方について考えさせられた。
・将来自分の仕事をイメージしながら考えることができた。
・本当の健康とは何かについて改めて考えさせられた。

・植物についてもっと知りたいと思った。

（社会人）

・皆さんの健康への関心の高さに感銘を受けました。

・年齢差を超えた意見交換ができることはとてもいい刺激になります。

・みなさんの前で自分の経験を語ることで、改めて伝えることの難しさを学びました。

・世代を越えて伝えられたものにはどういった意味があるのか、もう一度みんなで考えてみたい。

・一緒に文献を読み合うことで、また新しい視野が開けた。

（教員）

・健康である今こそ、本当の健康とは？を考えてみることが大切だと実感した。

・東洋思想が東洋人である我々の中にも息づいていることを再認識した。

・お二人の健康に対する理論と実践をうかがって、人としての幸せについて学生と議論できたことが非常に意義深かった。

３．まとめ

限りある命を与えられた時から、人は健康を意識せずにはいられない。現代はそれを象徴するかのように健康産業が非常に盛んで、時に不安をあおるかのような情報を発信しながら商品を販売する傾向さえ見られることがある。このような多数の、根拠が見えにくい情報が氾濫する時代の中で、大学が取り組むべき教養教育とは何か？と問われた時、それは「本質を見る力を養う教育」ということができるように思う。

本講座は東洋思想の視点を学ぶことから始まった。到底、一朝一夕に理解できるものではないが、各人が持っている自然観や死生観について話し合うことで、共通の思想が息づいていることを知ることができた。また、植物に触れ合いながらクスリと健康への理解を深めることで、体験を通じて学ぶことの大切さや確かさを実感できた。このことは、今私たちが目に見えているものや出来事には、どれもその原因となる、目には見えない部分が存在すること、つまり本質に気づかせてくれるきっかけとなったように思う。

“学び”のきっかけには“気づき”が必要である。本来授業とはその“気づき”につながる要素を随所に含んだものであるといえる。しかし、本講座の実施によって発見したことは、経験のバトンタッチは社会人から学生であったとしても、気づきのバトンタッチは双方向であるということである。そこに教員から学生へという一方向型の講義スタイルを越えた本取組の意義があるといえるだろう。さらに伝え合う、話し合う、感じ合うという双方向のやり取りの中で得た“気づき”は各人の個性によって多様な“学び”を生み、誰でもが学びの発信者となり得るのである。その発信者となる時、本質を捉え、考え、伝えることのできる力を身につけているかどうかが、本取組の目指すところとなるだろう。

写真１：社会人の体験を聞き話し合う

写真２：薬草園見学

写真３：『ツボ』について質問する学生